

Title	地域社会と社会教育：文庫活動の展開と主婦の意識変化をめぐる一事例研究
Sub Title	Local community and social education : a case study of a housewives' home library movement
Author	清原, 慶子(Kiyohara, Keiko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1978
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.18 (1978.),p.65- 73
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000018-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

地域社会と社会教育

—文庫活動の展開と主婦の意識変化をめぐる一事例研究—

Local Community and Social Education

—A Case Study of A Housewives' Home Library Movement—

清原慶子

Keiko Kiyohara

I. 初めに

現在、社会通念としての男女の役割分業は、あいかわらず、女性に家事・育児の役割を果すように求めているが、戦後日本における一世帯当りの子ども数の相対的な減少、家事の電化・合理化の進展は、主婦に家事・育児以外の自由時間の増加をもたらしている。他面では、教育水準も上昇し、婦人の高学歴化も促されている。このような状況の中で、最近では主婦の再就職の増加傾向が顕著である¹⁾。一方で、就業していない所謂専業主婦層の社会活動や学習活動が活発化している。

社会活動とは「家事育児以外の個人生活、社会生活の充実向上を目的としておこなわれるすべての活動」である「社会的な活動」のうち、「収入を伴わない」ものである²⁾。それには、茶華道等の趣味的活動、英会話等の教養的学習活動、簿記等の技術資格修得活動、ボランティア活動、住民運動、政治的活動というような多様な領域がある。

その中で、昭和40年代後半から激増している文庫活動は注目に値する傾向を持っている。つまり、それは①市民により設置され、運営されている子どものための小さな図書館というボランティア活動だけでなく、②読書を中心とした多様な活動を展開する地域活動であり、③図書館建設運動などの住民運動を行ったり、④児童文化や子どもの本を学ぶ学習グループの組織化をすというように、いくつかの性格を合わせ持つようになってきているのである。

そこで、本稿では、この文庫活動について、東京都三鷹市の事例を中心として、第一に、その活動の特徴を明

らかにし、第二に、社会教育との結びつきについて若干の検討を加えたい。

II. 文庫活動の特徴

(1) 読書運動としての文庫活動

文庫とは、付近に住む子どもを対象として、児童図書の間覧や貸し出しをするために、市民によって設置、運営されている小さな図書館である。日本におけるその発生の契機は、昭和30年以降の「悪書追放運動」であったが、「子どもの手近に良い本を」という標語に基づいて昭和26年開設の村岡花子の「みちをライブラリー文庫」を初めとする文庫作りが一部では始まっていた³⁾。そして、昭和37年の「家庭文庫研究会」設立は「家庭文庫」という名称を一般化した。ついで、昭和42年、町田市立図書館の働きかけでできた町内会文庫が「地域文庫」と呼ばれ、その後グループや団体を基盤にできた文庫が「地域文庫」と呼ばれるようになった⁴⁾。

また、昭和35年に鹿児島県立図書館の椋鳩十が『母と子の20分間読書』を提唱し、これがさらに「親子読書運動」や絵本の「読みきかせ」の実践へと発展することになる。さらに、昭和40年に石井桃子が「かつら文庫」の実践記録を発表したことは、それまで少しずつ増加していた家庭文庫を激増させる引金となった。そして、石井がその著書の中で掲げた「ポストの数ほどに図書館を⁵⁾」という言葉はそれ以後の図書館要求運動の標語となったのである。

また、昭和42年の「日本親子読書センター」や昭和45年の「日本子どもの本研究会」、「親子読書・地域文庫全国連絡会」の設立を契機に、読書運動の全国的推進と見

童文化の研究がはかられている。

ところで、日本全国の文庫数であるが、昭和30年代初期には50足らずであったが、昭和45年の調査⁹⁾では266、そして昭和49年の調査⁷⁾では2064に激増し、昭和51年末には約 3000 と推測されている⁹⁾。文庫急増の原因については、①文化的要求の増大と文化的環境の劣悪化、②テレビの発達による読書時間の減少、③児童書価格の高

騰、④図書館サービスの遅れ、などが指摘されている⁹⁾。

もちろん、個々の文庫にはそれぞれに設立の動機があり、決して一様ではないが、共通しているのは「子どもの手近に良い本を」という姿勢であった。その意味で、文庫活動を読書運動として特徴づけることができる。

三鷹市¹⁰⁾の場合をみると、昭和52年9月現在、文庫数は26を数える。そのうちで、個人の自宅に設置され運営されている家庭文庫は15、地域の公共施設に設置されグループで運営されている地域文庫は9、親子読書会は2である。開始年月日は昭和42年のものが最も古く、続いて昭和43年に2つが開始されたが、その他の文庫は殆んど昭和47年以降の5年間に開始されており、全国的な読書運動の高まりと呼応している。文庫は大半が毎週1回、平日の午後2時から3時間開庫している。主たる活動内容は児童書の閲覧と貸し出しであるが、それ以外にも、絵本の読みかきせやストーリーテリングを日常活動として行なっている文庫が多い。また、人形劇や工作の指導、野外読書会、映画会、クリスマス会、キャンプなどの開催を行なうなど多様な活動を展開している。しかも、こうした読書運動をすすめていく為に開設された文庫は、母親たちのボランティア活動によって運営されているのである。

(2) ボランティア活動としての文庫活動

ボランティア活動を、「行政施策の不備、欠落を市民自らの力で自発的に補おうとする¹¹⁾」ものだと捉えるならば、文庫活動は不十分な図書館行政を補完し、子どもに良書を与える環境作りをしているボランティア活動のひとつだといえることができる。しかも、これは専業主婦によるボランティア活動である。

筆者は昭和51年11月から翌年1月にかけて20文庫(後述の文庫連絡会に加盟している全文庫)を回り、以後に行なう予定である本格的調査の予備調査として、53名の世話人にインタビュー調査を行なった。世話人は全員が主婦であり、年齢構成は表3で示すように35歳から39歳が中心で約60%を占めている。世話人の子どもの数は2人の人が約半分を占め3人が36%で、子どものいない人は一人もいなかった。平均出生児数は2.38人である¹²⁾。

表3 三鷹市文庫活動世話人の年齢構成 (S52. 2. 1現在)

年 齢	25~ 29歳	30~ 34歳	35~ 39歳	40~ 44歳	45~ 49歳	50~ 54歳
人 数	3人	9	31	7	1	2
構 成 比	5.7%	17.0	58.5	13.2	1.9	3.8

表1 三鷹市の過去五年間の文庫数の変遷

	S47. 7.1	S48. 7.1	S49. 1.1	S50. 4.1	S51. 4.1	S52. 9.1
家庭文庫	3	14	16	15	12	14
地域文庫	5	11	10	13	12	12
計	8	25	26	28	24	26

表2 三鷹市文庫活動の状況 (S52. 4月現在)

文庫	開始年	世話人数	利用者数	文庫の蔵書	市の助成金による本	図書館より借出
A	S48	20人	300人	800冊	240冊	50冊
B	48	26	144	370	244	202
C	47	10	280	200	243	700
D	43	15	120	700	242	0
E	48	7	80	500	300	300
F	48	1	30	300	0	0
G	49	4	43	260	27	100
H	47	3		115	85	351
I	48	4	39	30	58	135
J	50	27	198	9	224	200
K	50	20	100	200	246	188
L	43	1	27			53
M	48	11	135	297	268	59
N	51	2	197	700		150
O	42	15	348			
P	48	11	70	520	228	110
Q	47	3	64		136	
R	50	5	60	50	54	167
S	50	19	81	3100	200	
T	51	15	150	420	171	162

表4 三鷹市文庫活動世話人の子どもの人数

子ども数	1人	2人	3人	4人以上
人数	5人	26	19	3
構成比	9.4%	49.1	35.9	5.7

表5 三鷹市文庫活動世話人の子どもの年齢構成 (S52. 2. 1 現在)

	年齢	0～2歳	3～6歳	7～9歳	10～12歳	13～15歳	16～19歳	20歳以上
全	人数	4人	40	41	19	11	7	2
子	構成比	3.2%	32.3	33.1	15.3	8.9	5.6	1.6
末	人数	4人	30	11	5	2	1	0
子	構成比	9.3%	56.7	20.8	9.4	3.8	1.9	0

子どもの年齢構成は表5の様に、3歳から9歳までの就学前の幼児及び小学校低学年の児童が60%を占めている¹³⁾。また、末子年齢をみると、0歳から6歳までの乳幼児が60%を占めている。

以上から、世話人の殆どが乳幼児を持つ母親であることがわかる。しかも、乳幼児のいることや子ども数の多いことが母親の活動の制約条件とはならず、むしろ文庫活動の場合は子どもの多い母親の方が関心が高い。つまり、「自分の子どもの為」の読書を考えることが、「より多くの子どもの為」の読書を考えることの基礎をなしているといえるだろう。

ところで、文庫の運営には、図書や本棚等の備品購入に費用がかかる。図書については図書館からの団体貸し出しや、市の助成金による購入及び市民の寄贈本による協力を受けてはいるが、それでも十分ではない。そこで会費または入会金を徴収している文庫もあるが、それも全く少額である。通常の場合は、地区公会堂の清掃や廃品回収、バザーの開催等による資金調達、カンパ、世話人のポケットマネー等に殆ど負っている。まして、金銭的利益を目的としている文庫活動は全くない。

以上のように、文庫活動とは、読書の素晴らしさをわが子だけでなく近所の子ども達にも知らせてあげたいという、母親の素朴な願いを実現しようとするボランティア活動だといえよう。そして、その活動は、地域の子どもたちに対して「本のある遊び場¹⁴⁾」を開いているという点で、地域とのかかわりを持つのである。

(3) 地域活動としての文庫活動

地域文庫は、地域の公共施設を使って運営されてい

る。三鷹市の場合には、地区公会堂を使用しているものが6文庫、団地集会室を使っているものが2文庫ある。その中で、町会の図書部として町会の助成費によって運営されているものが2文庫、「むさしの子ども劇場¹⁵⁾」の地区サークル活動として行なわれているものが3文庫ある。それだけでなく、前述のように、家庭文庫も地域の子どもを対象して運営されているのである。

「5年近くも地域文庫にかかわっておりますと、いろいろなことを考えさせられます。その一つは、わが子も含めて子どもというものは、まさに地域の中で育ちゆくのだという事実です。¹⁶⁾」と、ある世話人は述べている。まさにこの事実からも、文庫活動は地域活動のひとつとして捉えることができる。

上述の点に関連して、三鷹市のコミュニティ政策と文庫活動について、若干言及しておこう。日本では、1960年代後半からコミュニティ論が本格的に提起されるようになった。昭和44年の国民生活審議会調査部会コミュニティ問題小委員会の『コミュニティ——生活の場における人間性の回復——』(中間報告)を契機に、政府、財界のコミュニティ構想が次々と提起され、その政策化がすすめられてきた。それは、住民の「相互信頼」と「心のつながり」の創造を基底にすえた住民の行政参加の定着、地域住民団体の組織化とコミュニティ・リーダーの養成などの方向を志向している¹⁷⁾。

こうした推移の中で、三鷹市においても独自のコミュニティプランが進められた。その中心となるのがコミュニティセンターの建設であった。コミュニティ政策そのものについての詳述はここでは差し控え、第一号のコミュニティセンターである大沢コミュニティセンターの図書室と文庫活動について略述しよう。

大沢コミュニティセンターは、スポーツ・レクリエーション機能、福祉機能、社会教育機能、サービス機能を兼備している、複合的で大規模な総合施設である¹⁸⁾。センターの目的は、それを地域の中心として位置づけることにより、住民に地域を再認識させ、かつ地域社会への参加を動機づけることである。

コミュニティセンターの最も大きな特徴は、その管理と運営が地域住民によって行なわれていることにある。この住民参加は昭和49年2月のオープンの2年前に「大沢コミュニティセンター研究会」が作られた時から始まっている。この研究会はいくつかの分科会に分かれて活動したのであるが、その中のひとつに図書分科会があった。その活動は昭和48年1月から開始され、翌年2月までに21回の会が持たれた。最終的会員数17名のうち文庫

関係者が6名であり、班長もその中から選ばれた。文庫活動をしている6名は「近所の子どもに良い本を」というボランティア活動をした人々であり、実際の図書館行政の実情やあり方についてそれほど深い知識を持っていたわけではない。しかし、コミュニティセンターが建設され、図書室が設けられることになって、その図書室に最も関心を持ったのが、こうした文庫活動経験者であったことは事実である。すなわち、自己の文庫活動の経験から、読書を中心とした子どもコミュニケーションの場が地域に必要なかつ重要であることを痛感していた人々が、それまで潜在的に抱いていた「望ましい図書館像」を実現する機会をここに捉えたのである。活動経過¹⁹⁾を見てみると、彼らは三多摩の先進的図書館の見学や学習等の活動を経て三鷹市という自分の住む地域の図書館行政を再認識している。そこで、コミュニティセンター図書室を、図書館の分館とするか否かが重大な争点となった。しかし、結局分館として位置づけられることはなく開室した。運営は住民代表による運営委員会に委ねられているが、図書分科会は図書室友の会として再組織され、ボランティアで日常活動に協力している²⁰⁾。

しかし、一方では「友の会に参加したり、読みきかせをしたり、地域の方たちのためにと素朴な思いで活動している私たちなのですが、やればやるほど、図書館は素人でもできるという錯覚をおこさせ、安上り行政を助けることになり、専門職の方たちの足をひっぱることになるのではないかという悩みにおちいる²¹⁾」という問題も提起されている。

このように、地域活動としての性格を持っている文庫活動は、日常活動を通じて、子ども達に対しては自分の地域を認識させると同時に、世話人に対してはコミュニティセンターなどの地域の具体的問題に積極的に関与するという態度を醸成しているのである。

こうした地域への関心の高まりは、地域行政への関心の高まりを伴い、さらに住民運動として展開する傾向もあらわれてきている。

(4) 住民運動としての文庫活動

「誰でも本が身近にあれば本を読むし、本を身近におくため、図書館が町に村にポストの数ほど必要である。²²⁾」

しかし、現実には図書館は非常に少ない。こうした状況下で、子どもに良い本を読ませたいという母親の願望が文庫活動を生んだのであり、最近では日常の文庫活動だけでなく、それを踏まえて、行政側に対して読書環境の改善と根本的政策の実施を要求するという住民運動とし

ての性格を持ってきている。この点も、文庫活動の新しい傾向として注目されよう。

こうした傾向の背景には、日本の公共図書館数、蔵書冊数、専門職員数の不足と、図書館サービスの不十分という状況がある。文庫活動とは決して図書館作りを目的としているわけではないが、現実の図書館数不足や内容不備が、結果として人々に図書館作り運動²³⁾を喚起してきている。

ところで、文庫活動の持つ住民運動としての側面は、決して図書館作り運動のみに限られてはいない。ただ、最近では施設作り運動が全国的な広がりを見せており、その事例を収録した本²⁴⁾も編集され、ここに焦点が集まっているのである。また、多くの事例をある視点からパターン分けする作業も行なわれている。しかし、運動形態は地域の持つ諸条件によって多様であり、個々の運動ごとに活動内容は異なるので、一律な規準で分類することには危険が伴う。そこで、ここでは無理な枠組作りをすることを避け、三鷹市の経過を概観するのみにとどめよう。

地域の文庫連絡会の結成が、文庫活動が請願運動などを始める契機となっている例が多い。三鷹市においても同様の傾向が指摘できる。三鷹市地域家庭文庫おやこ読書会連絡会（以下文庫連絡会と略称する）は、昭和49年4月に発足した。当時、世話人達は文庫連絡会を各文庫の情報交換や勉強会を行なうものと認識していた²⁵⁾。しかし、翌年制定された規約には次のように書かれている。すなわち、会の目的は、「創造性豊かな子ども達を育てることを目的とした地域文庫、家庭文庫、親子読書会相互の交流をはかり、あらゆる思想信条を超えて活動」することであり、活動は、「会員相互の連絡及び図書館との交流のために月一回の定例会を開き」、「図書館をより充実するため、図書館と協力し、諸活動を行ない」、「会員の向上を図るため、随時勉強を行なう」というものである²⁶⁾。

住民の主体的で自律的な活動としての文庫活動の性格は変わらないとしても、連絡会の結成は、同じ地域内の文庫の交流を促すと同時に、個人では解決しにくい問題を連帯して解決していこうとする姿勢を生み出したのである。それが結成一年後に作られた規約に反映されているといえよう。しかし、確認すべきは、文庫連絡会が住民運動を目的として結成されてはいないことである。

三鷹市文庫連絡会の住民運動としての活動をみてみると、第一に文庫活動そのものの向上に関する行政側の働きかけを要求したものと、第二に、図書館行政の改善を要求したものとがある。

第一の例としては、昭和50年6月に行なわれた文庫連絡会への市費助成の請願運動がある。これは、文庫数の増加や各文庫の貸し出し冊数の急増に対する、図書館の児童図書及び絵本の稀少さを市に訴えたものである。この時は6月の補正予算を審議する市議会に対し2070名が署名をした請願書を提出した。請願運動は超党派で行なわれ、8月末日の文教委員に対する説明を経て、9月13日市議会で採択された。そして、12月には補正予算で1,900,600円の助成費がおりた。それに引き続き翌年度は1,382,000円が予算に組み込まれた。

他方では、文庫の会場問題も深刻になり、この点を問題とする動きもでてきている。例えば、昭和51年5月、地区公会堂の利用について市民部コミュニティ課と会合を持ち、11月下旬には文庫連絡会として実態や要望を文書化して、教育長、社会教育委員、コミュニティ課に配付している。

第二の図書館行政の改善を要求する運動としては、昭和51年2月の社会教育委員会に対する「三鷹市の図書館五ヶ年計画への要望書」の提出、昭和52年7月の三鷹市立図書館の日曜開館を要求する署名運動が挙げられる。後者については、市長あて6543名、市議会議長あて6502名の署名が集められ、7月28日、文庫連絡会の代表によって提出された。この陳情は8月29日付で採択と決定され、市長及び教育委員会に送付された。こうした運動の経過を経て、11月6日より日曜開館が実施されている。

ところで、このような住民運動が具体的な形で展開される基礎として、図書館職員との交流会や市長、教育長、図書館長との数度にわたる話し合いの機会が持たれていることは看過できない²⁷⁾。こうして、文庫活動は「読書環境の改善をはかる手だてを講じながら、行政に向けて根本策の実行を迫る²⁸⁾」という、まさに住民運動としての性格を持ってきているのである。

III. 文庫活動と社会教育

最近の社会活動や住民運動をみていると、活動内容に関連した学習機会を持つ場合が多い。文庫活動についても、その世話人が活動に関連した学習を行ったり、学習をひとつの契機として文庫活動を始めている例もみられる。

三鷹市の文庫活動世話人の社会教育への参加経験をみると、表6の通り約70%が参加経験を持っている。それは、一方は行政主催によるものであり、他方は自主グループである。しかし、現在、行政主催によって開かれている講座であっても、文庫活動世話人が中心となっ

表6 三鷹市文庫活動世話人の社会教育参加経験

参加経験	有	無
人数	35人	18
構成比	66.0%	34.0

て行政に働きかけ、行政に学習の場を保障させているものもある。以下で、文庫活動世話人が参加している社会教育について個別にみてみよう。

(1) 図書館主催の地域文庫リーダー養成講座

三鷹市内の文庫活動は昭和46年頃から特に盛んになってきた。世話人達は日常運営の経験から、子どもの本の選び方、与え方、読みかきせ方などを学習する必要性を痛感してきたので、こうした問題についての講座企画を図書館に要請するようになった。また、本館と分館をひとつしか持たない三鷹市の図書館にとって、分館網確立まで文庫が担う補完的役割は大きい。そこで、文庫活動を推進するリーダー養成のために、昭和48年度より文庫リーダー養成講座が実施されている。

ところで、前述の通り昭和49年2月より文庫連絡会が発足したが、昭和50年度からはその講座を文庫連絡会も共催することとなったので、講座内容に文庫活動世話人の要望が直接反映されることとなった。

(2) 三鷹市市民大学総合コース「生活と児童文化」

三鷹市の成人教育事業は、大別すると、市民大学、婦人教室、家庭教育学級、高齢者対象学級に分けられる。そのうち市民大学は、昭和36年の成人学校に始まり、昭和47年に文部省委託社会教育学校となり、昭和43年から市民大学と名称を変更したものである。それは昭和43年よりコース制をとり、学習内容、方法の構造化がはかられ、専攻コース、一般教養コース、生活趣味実技コースの三つに分けられている²⁹⁾。その専攻コースが昭和51年度より総合コースと名称変更され現在に至っている。総合コースは、昭和43年度より主体的市民としての自治意識を呼び起すための学習活動として開催されてきている。それは毎年5月開講で翌年3月まで毎週1回2時間行なわれる継続学習である。昭和52年度現在で、コースはさらに「生活と文学」「生活と思想」「生活と歴史」「生活と児童文化」の四学級に分かれ、全体で80名の定員である。学級生の子どものうち2才児以上は20名まで保育を受けられる。コースの運営は、学級生と各学級についている講師と行政側の三者で構成している運営委員会でなう。学習方法はセミナー方式であり、学級での相互学習と家庭での自己学習とを相互に関連させていくこ

とで、学級生の生活体験と科学を結びつけることをめざしている。そして、各年度毎に統一テーマを定め、それについて各学級がそれぞれの角度から学習を行ない、全体学習会を通じて各学級相互の学習の交流を図る。

ところで、総合コースにおいては、昭和47年度までは「生活と文学」「生活と思想」「生活と歴史」の三学級のみが設けられていた。「生活と児童文化」は昭和48年度から設けられたが、この開設を推進したのが文庫活動の世話人を中心とする母親だったのである。これらの母親たちは、昭和47年度市民大学一般教養コースにおける、市立図書館主催の「本と子どもと母親と」「子どもの本の研究」という2つの講座に参加していた。つまり、そこでの学習が更なる学習への動機づけとなって、既設の総合コースの中に児童文化に関する学級を設けよという継続学習の要望が出されたのである。この要望は運営委員会で協議され、その結果、昭和48年度より「生活と児童文化」が増設されたのである³⁰⁾。

再述すれば、総合コースの中に「生活と児童文化」を設置する推進力となったのが文庫活動の世話人であったし、こうした世話人の存在が継続学習の場を獲得する大きな力となっていた。しかし、昭和52年度は講師の決定が難行したり、「生活と児童文化」そのものが総合コースからはずされそうになった。そこで、学級生の中には、「これからの学習のなかで総合コースの中に児童文化の学級を定着させることとこの意義のようなものを私自身の中で明確にしていきたい。」³¹⁾という意識が芽生えているのである。

(3) 三鷹市青少年の家市民大学、「お話勉強会」「生活の中の民話」

三鷹市には児童館として青少年の家がある。そこには青少年の家施設利用者懇談会が組織されている。その会では開設講座や自主グループ間の情報交換を初めとして、それぞれの問題点を話し合ったり、青少年の家の施設利用や事業計画を話し合う。そこで、昭和51年度の事業計画を話し合う際、文庫活動の世話人が働きかけて、ストーリーテリングを学習する講座を市民大学として開設することとなった。ここにも総合コースと同様に、文庫活動世話人の社会教育に対する積極的な姿勢があらわれている。講座参加者42名の内文庫世話人は27名である³²⁾。講座は5月から12月まで23回、親子読書地域文庫全国連絡会会長土屋洗子氏を講師として開かれた。その後昭和52年1月から3月までは、文庫活動世話人20名と他2名で自主グループとして学習が継続された。自主グループとして残った者の殆どが文庫活動世話人である

ことは特に注目して良いだろう。

また、昭和52年度も利用者懇談会を経て土屋洗子氏を講師として「生活のなかの民話」という学級が開設されている。30名の学級生の内文庫活動世話人は20名である。

(4) 文庫連絡会の自主グループ

昭和49年2月に文庫連絡会が発足すると、それまで各文庫の世話人が必要だと痛感していた学習の場を自分たちで作ろうという動きが具体化し、5月より「読みきかせ勉強会」という自主グループが発足した。そして、昭和51年3月までは社会教育会館を会場として、毎月1回2時間ずつ、三鷹市在住の作家であり文庫活動経験者である清水美千子氏を講師として存続された。運営費は文庫連絡会より補助を受け、実質的には文庫連絡会の研修部門として機能していた。また、昭和51年度からは「絵本研究会」と改称し、毎月2回開くこととし、そのうち1回は読みきかせの勉強、あとの1回は絵本についての勉強を行なった。講師は清水美千子氏、社会教育会館を会場とし、参加者は約50名で、学習の運営は各文庫が交代で司会、記録を行ない、学習内容を印刷配布するなどの工夫をしながら活発に行なわれた。

ところが、たとえ文庫連絡会の研修部門であったとはいえ、自主グループでは文庫活動を拡げていくことは困難である。そこで、彼らはより広い市民に絵本の世界を知らせたいという要求から、昭和52年度は市民大学の中に組み入れるようにとの要望書を行政側に提出した。その時点では社会教育会館には利用者連絡会を通じて交渉するという方法が確立されていなかったため、行政側に直接提出することになった。その要望には、昭和52年度の第Ⅱ期に市民大学として開設されるというように回答された。そこで、それまでの間は文庫連絡会の研修部門として民話についての学習会が表7のように開かれた。

表7 昭和52年度三鷹文庫連絡会民話勉強会

回数	月日	内 容	参加者数
1	5.20	民話にみる母と娘	80
2	27	生きた言葉・生きた語り	77
3	6. 3	民話の笑いと風刺	65
4	24	民話の絵について	61
5	7. 1	歩いてきく東京の民話	67
6	8	舞台人としての民話の語り	62
7	15	教科書にみる民話	63

このような多彩な講師を招いた学習会が自主グループとして運営できるという条件には、三鷹市では近隣に住む児童文学関係の専門家が多いこと、三鷹市が現在読書運動のリーダーシップをとっている人々にとってゆかりの土地であること³⁸⁾、文庫運営者の中に子どもの本研究会に属する専門家がいることなどが挙げられる。しかし、それにもまして、文庫活動世話人の学習意欲が高いことや社会教育そのものへの関心の高さが動因となっていることも指摘できる。一例を挙げれば、昨年より社会教育会館を利用している100余りの自主グループに働きかけて、公民館利用者連絡会を発足させようとした動きがあったが、その準備会には文庫活動世話人が加わっていた。なお、利用者連絡会は昭和52年3月に発足した。

(5) その他の学習機会

以上の他に、図書館後援により各文庫主催で講演会や学習会を開いたり、親子読書地域文庫全国連絡会、日本親子読書センター、日本子どもの本研究会主催の全国交流会や児童文化講座に参加する文庫活動世話人も多い。

IV. 終わりに——文庫活動と社会教育にみる主婦の意識の変化——

文庫活動は主婦というより母親によって行なわれている社会活動のひとつである。それは、母親として自分の子どもを見つめることから始まっている。すなわち、自分の子どもに良い本を与えたいという願望に基づいている。こうした願望を持って環境を注視する時、確かに図書の出版点数は増加しているが、他面では書価が高騰している³⁹⁾ために、子どもに十分に買い与えることは困難である。その上、図書館へ行くには地理的に遠いし、本も不十分である。そこで、母親たちは自分の子どもだけでなく、地域の子どもの取りまいてる読書環境の悪さを初めて認識する。この時点で、彼らの視野は地域の子ども全体へと拡大する。そして自主的な無償のボランティア活動として文庫活動が開始される。文庫活動の出発点には、子どもに良い本を与えようとするボランティア精神があることを確認しておく必要がある。

ところが、地域活動としての文庫活動を展開していくにつれて、文庫活動が図書館行政の不備を補完する役割を果たしていることを自覚してくる。この自覚から文庫活動は二つの方向に活動の領域を拡大していくようになる。すなわち、第一の方向とは、図書館行政そのものの改善と充実を行政側に要求する住民運動の展開であり、第二の方向とは、文庫活動をしていく上で必要な専門知識や読書指導を学習する社会教育活動への参加である。

文庫活動はその基礎に読書運動としての性格を持つとはいえ、それは決して住民運動として始められたわけではなく、また学習活動を伴っていたわけでもない。しかし、文庫活動を展開する過程で、“地域社会の見直し”と“地域社会の担い手としての自己の発見”が行なわれ、“地域住民としての自覚”がなされる。こうした自主的学習機会の創造と住民運動への参加を通じて“市民意識の覚醒”がなされていることが指摘できる。

社会活動を進める中での意識の変化については、総理府調査⁴⁰⁾においても、「活動意欲の高まり」「社会的視野のひろがり」「知識の深まり」「新しい連帯感」の四点が指摘されているが、文庫活動もそれに伴う学習活動や文庫連絡会の活動を通じて、同様の変化を体験している。特に、三鷹市の文庫連絡会の場合は、学習機会を多く伴っている点が世話人自身の意識変化をより強く自覚させている。世話人の声を引用しておこう。

「この一年間を振り返って、まず一番に言えることは、たくさんの母親の勉強会への参加だと思います。(中略)これらの勉強会を通して、子どもの本の素晴らしさを知ると同時に、氾濫する絵本の中から良い本を選ぶことの難しさを痛感し、お互いにもっと研究していかなければという意欲がわいてくるのでした。⁴⁰⁾」また、世話人以外の学級生も、「児童文化コースに属し、内外の児童文学作品に触れ得た喜びは勿論だったが、それ以上に地域の中に溶け込んで、PTAや消費者活動、家庭文庫活動等に携わり、多忙な中にも専業主婦として充実した生活を築いている多くの人々を知った事は驚きであった。その結果、単に三鷹に居住しているに過ぎなかった生活から、三鷹市というコミュニティの一員としての意識がめばえてきたような気がする⁴¹⁾」というように感想を述べている。

それでは、文庫活動世話人はどんな母親なのだろうか。何か共通した特徴を持っているのであろうか。予備調査によると、学歴は表8の通りであるが、中学校卒が0である点からみれば若干高学歴化が示されている。就業経験については表9の通り、有るものが80%を占めており、職種は教職がやや多い点が目につく。しかし、現在

表8 三鷹市文庫活動世話人の学歴

学歴	中学校	高等学校	専門学校	短期大学	四年制大学	N. A
人数	0人	23	7	5	17	1
構成比	0%	43.4	13.2	9.4	32.1	1.9

表9 三鷹市文庫活動世話人の就業経験

就業経験	有	無
人数	43人	10人
構成比	81.1%	18.9%

職種	事務職	教職	専門技術職	公務員	販売サービス	その他
人数	18人	14	3	3	3	2
構成比	41.9%	32.6	7.0	7.0	7.0	4.5

表10 三鷹市文庫活動世話人の夫の職業

職種	会社員	教職	公務員	自営業	団体職員	自由業
人数	39人	5	4	2	2	1
構成比	73.6%	9.4	7.6	3.8	3.8	1.9

表11 三鷹市文庫活動世話人の社会活動参加経験

活動経験	有				無
参加活動数	1つ	2つ	3つ	4つ以上	0
人数	20人	10	6	4	13
構成比	37.7%	18.9	11.3	7.6	24.5

フルタイムの職業を持つものは1名であり、パートタイムは6名である。そして、夫の職業は殆んどが被傭者であり、昼間は家にいない。このことは文庫活動も学習活動も、夫のいない昼間に行なわれている事実を裏付けている。また、文庫活動以外の社会活動に参加している者も、表10の通り約75%いる。その内容もPTA役員、生協活動役員、教科書裁判支援運動など多様である。要約すると、文庫活動は、職業を持っていない比較的高学歴の所謂“専業主婦”によって行なわれている活動であるといえよう。また、文庫活動世話人には社会教育に参加していると同時に、他の社会活動を行なっている者が多い。このことは前述の市民意識の覚醒のひとつの証左だと言えよう。

しかし、その市民意識の覚醒の過程は個人により相異があるし、特に住民運動的な行動については意識のギャップの拡大もあらわれてきている。また、文庫活動と図書館職員や社会教育行政との関係も重要課題となってきている。これらの諸問題については、他地域の事例との比較検討を含め、今後更なる研究が必要だと考える。

註

- 1) 昭和50年には勤労婦人の内、30歳以上の者が57%を占め、有配偶者は離死別を含めると62%である。労働省婦人少年局編『昭和51年版婦人労働の実情』大蔵省印刷局、昭和51年、P 9
- 2) 吉田昇、神田道子編『現代の女性の意識と生活』日本放送出版協会、昭和50年、P 190-191
- 3) この他に、昭和27年、金森好子の「クローバー子ども図書館」、昭和30年、「土屋文庫」、昭和33年、石井桃子の「かつら文庫」が開設されている、
- 4) 小河内芳子「家庭・地域文庫について」『季刊子どもの本棚19』昭和51年11月号、P 5
- 5) 石井桃子『子どもの図書館』岩波書店、昭和40年、P 210
- 6) 文庫づくり運動調査委員会『地域家庭文庫の現状と課題』日本図書館協会、昭和47年
- 7) 児童図書館研究会編『年報子どもの図書館 1975年版』日本図書館協会、昭和51年
- 8) 小河内芳子、前掲 P 5
- 9) 藤本浩之輔『子どもの遊び空間』日本放送出版協会昭和49年、P 149
- 10) 東京の23区に隣接する、東西6.4 km、南北4.8 kmに広がる面積 16.83 km²、人口 16万1832人（昭和52年9月現在）の都市近郊ベッドタウンの性格を持つ市である。
- 11) 婦人に関する諸問題調査会議編『現代日本女性の意識と行動』大蔵省印刷局、昭和49年、P 297
- 12) ちなみに日本人の平均出生児数は1.91人であり、2人を下回っている。厚生省統計情報部『昭和50年人口動態統計』
- 13) この構成比は、実際に文庫を利用している子どもの割合とほぼ一致する。例えば、文庫Nは利用者197人の内幼児から小学校3年生までで160人、全体の80%を占めている。
- 14) よこはま文庫の会編『ひろがる読書の輪—横浜の文庫—』昭和51年、P 95
- 15) 「子どものためのすぐれた芸術を鑑賞し、児童文化の創造と発展に努力する」という目的のために、演劇・音楽の例を中心とした活動を行なっている団体。むさしの子ども劇場は昭和47年に発足したが、全国連絡会は昭和51年現在181劇場20数万名に広がっている。
- 16) 三鷹市地域・家庭文庫おやこ読書会連絡会『51年度のあゆみ—輪を広げる文庫活動』昭和52年、P 26
- 17) 千野陽一「コミュニティと社会教育」千野陽一編『コミュニティと社会教育』昭和51年、P 10-14
- 18) 湯上二郎企画『事例研究、社会教育に関する施設—設置と運営—』全日本社会教育連合会、昭和50年、P 31-36
経済企画庁国民生活局『コミュニティとくらしの環境—住民参加の町づくり—』大蔵省印刷局、昭和50年、P 99-104
- 19) 『大沢コミュニティセンター図書分科会の記録』昭和49年2月

- 20) この経緯については栗山規子「大沢の図書館づくりの運動を通して」『図書館問題研究会東京支部ニュース』昭和49年5月16日号P7-8
大沢コミュニティセンター図書友の会「コミュニティ・センターのなかの図書館活動」『親子読書』昭和52年9月号, P8-13
- 21) 栗山規子「大沢コミュニティの図書室その後」『図問研東京支部ニュース』昭和50年3月号, P5
- 22) 石井敦, 前川恒雄『図書館の発見』日本放送出版協会, 昭和48年, P4
- 23) 例えば, 大阪府枚方市の図書館6分館建設運動や東京都練馬区の平和台図書館建設運動がある。
枚方市企画室市立図書館『ひらかたの図書館行政』昭和48年, 内山早苗他「平和台図書館建設運動についての報告」ねりま地域文庫読書サークル連絡会編『地域文庫その広がり」と深まり』昭和52年, P39-44, 阿部雪枝「仮称・平和台図書館建設懇談会に参加して」東京都教育庁社会教育部計画課『東京の社会教育』第23巻第1号, 昭和51年, P4-6
- 24) 図書館問題研究会編『図書館づくり運動入門』草土文化昭和51年
- 25) 三鷹文庫連絡会編『一年間の活動の報告』昭和49年4月25日付。
- 26) 三鷹市文庫連絡会『50年度のあゆみ一輪を広げる文庫活動一』昭和51年, P4
- 27) 例えば, 市長との話し合いに限ってみても, S50. 5. 14, S50. 11. 11, S52. 3. 4と3回行なわれている。
- 28) 清水美千子「家庭文庫と地域文庫」『季刊子どもの本棚19』昭和51年11月号, P51-52
- 29) 三鷹市社会教育委員会『昭和47年度, みたかの成人教育』P7-17
渡辺晃行「市民による市民のための学校づくりの模索」東京都教育庁社会教育部『新しい学級・講座の創造をめざして』昭和49年, P39-49
- 30) 小林知枝「社会教育の場で学ぶ」『季刊子どもの本棚21』昭和52年, P107-109
昭和48年度の学習記録は, 渋谷清視編『わたしのなかの子どもの本』鳩の森書房, 昭和50年, として出版されている。
- 31) 小林知枝前掲, P110
- 32) 昭和51年度三鷹市青少年の家市民大学お話し勉強会の記録『お話しのともしびをかかげて』P27
- 33) 例えば日本子どもの本研究会代表増村王子氏, 事務局長代田昇氏は, かつて三鷹市の都立有三青少年文庫にて読書指導を行っていた。
- 34) 昭和50年度の新刊は, 22,727点, 平均値段は約2,394円である。『出版年鑑, 1976年版』出版ニュース社
- 35) 婦人に関する諸問題調査会議, 前掲書, P330-332
- 36) 三鷹市文庫連絡会『51年度のあゆみ一輪をひろげる文庫活動一』P82
- 37) 三鷹市民大学総合コース・三鷹市教育委員会『市民がつくる市民の学校』への歩み一昭和51年度総合コースの学習記録一』P56

(付記)

本研究にあたり, 三鷹市地域家庭文庫親子読書会連絡会, 三鷹市立図書館, 三鷹市社会教育会館, 三鷹市青少年の家の皆様に御協力いただいたことを記し, 感謝の意を表したい。